

日本列島隅々巡り 《建物たちとの遭遇》その2

伝統と前衛が程よく混交した金沢駅のデザイン 駅を潜り抜けた途端に訪問者は金沢のトリコに



巨大な鼓（つづみ）の意匠がガラスを支える金沢駅のデザインは優れてモダンだ

日本各地に現存する有名・無名の優れた建物たちを、旅や散歩の途次に訪ねる新シリーズ『日本列島隅々巡り《建物たちとの遭遇》』第2回目は、世界で最も美しい駅14選（米旅行誌『トラベル・レジャー』電子版）にも選出されたJR北陸本線・北陸新幹線他が発着する金沢駅だ。

写真は金沢駅を最も特徴づけている《鼓門（つづみもん）》を駅の構内から撮影したものだ。

とにかくその意匠の巨大さ、ガラスと木材を組み合わせたシンプルにして斬新すぎるデザインは、見る者すべてに強烈な印象をもたらさずにはおかない。

一目見た際の強烈な印象は、一種の違和感なのだが、不思議なことに2度目にはその斬新すぎるデザインが「しっくりしたものに」見える。そして最初に違和を感じた正体が強烈な「モダン力」なのだ。と気づくのだ。

ここでいう場合のモダンとは単に「新しい」とか「今風だ」とかいう意味だけを指すのではない。

伝統をどこかで引き継ぎつつ、その引き継ぎ方が前衛的な境地にまで至っていることなどのニュアンスも含めている。明治時代や大正時代の優れたデザインが、今も「モダン」と表現されるのは、その故である。モダンとはたとえば永く命脈を保ち続ける伝統工芸の本質をなす要素の一つだが、金沢こそは日本で最も伝統工芸を大事にする街の一つとして知られる。

そういう意味で完成当初（2015年の北陸新幹線開業に伴い完全リニューアル）は評判が悪かったとされる金沢駅が、すぐに愛されるようになったのは、モダンだからこそ。要するに金沢駅はいろいろな意味で金沢っぽいのである。

あまり指摘されないけれども、筆者は金沢駅と対をなす観光スポット（金沢駅は金沢観光で常に人気上位を占めている）の一つに、やはり国内外の観光客に大人気の「金沢21世紀美術館」を思い浮かべる。その理由については、次回の本欄で述べたい。（砂耳）